
棚機之夜

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棚機之夜

【Nコード】

N2223R

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

吉原亮平は、かつての友人であった啓太を見舞うために数年ぶりの帰郷を果たす。

十年ほど前のことであまり記憶も確かな話はできませんが、と婆さんのいうには、啓太は、ほら、そう、窓。そう、小豆色した、あの屋根。あの子があそこから落ちたって聞いた時は、もしかしたら、そういうこともやりかねないと思わされることがあったのに、どうして気づいてやれなかったか、いや、そんな事情があったとは考えも及ばないので……結局こうなったと諦めるしか……。

亮平が啓太のことを知り、母方の実家に何年かぶりにやってきて、当時近所に住んでいた婆さんを見かけ、懐かしさのあまり唐突に呼びかけた。

サツマイモの入った籠を背負って、窮屈そうに亮平の方を振り返っても、まだ誰だか分からないらしい婆さんの、よそものに対するしかめつらは、亮平にあれからかなりの年月が経ったことを実感させた。

自分の名前を教えたところで、婆さんの記憶を助ける呼び水にはならないことは、こちらが近づいているのを目にしたはずなのに、そのまま立ち去ろうとする様子で判断がついたが、遠い記憶となってしまったことへの淋しさを覚えたのには、彼自身驚きもあった。亮平にとってこの町はとくに過去のものであるはずだった。

「隣に住んでた吉原ですけど、……おぼえていませんか。坂口さんですよ」

頬被りをとって、婆さんが白髪頭をこちらに向きなおし、もう一度繰り返せといわんばかりに顎をつきだした。亮平は手の届く距離に近づき、難聴の人にするようにさっきより声を張って、「坂口さんですか」と訊いた。

声は届いたようで、「ああ、あんたは誰だったかね」とはつきり喋ったのが意外だったから、すこし気後れして言葉に詰まり、先に婆さんが知らない男の名前を呼んだ。

「違います。ぼくは吉原亮平です。吉原商店のいとこの……」

口をだらしくあけ、ぼんやり亮平の後方にある曇り空を眺めるような目線の、いきなり瞼が活発になる瞬間に黒目の奥が、彼の顔にはつきりと焦点を合わせ、あうう、とうめきをあげ、

「……吉原さんとこの……はい、ああ……憶えとります。……亮平君やったる」

「久しぶりで……、その、友達が入院していると聞いて」

おおげさに眼をむき、彼女の耳にも啓太の自殺未遂が伝わっていたらしい素振りで、籠から手を離すと胸の前で重ね合わせ、そうやったねえ、と、啓太への悔やみの言葉をいう。

まだ死んだわけではないのに、婆さんにしてみれば、意識が戻らないのは死んだも同然のように考えているようで、まだこの婆さんは勘違いをしていると感じてはいたが、これ以上時間を費やしたくない思いから、軽く会釈をしそこを離れ、畑を抜けたところにある実家を目指した。

亮平の実家は旧庄屋で、家屋の半分ほどは建て直してあったものの、門構えは昔を残したままの姿で、それに連なる高い塀は、近隣の住人に畏怖の念を抱かせるようそのままにしてあった。亮平がそう思うのは、母の立場から祖父をことあるごとに嫌っていたからだった。祖父はよく母のことを困らせるような要求をしたり、場合によっては殴ったりもしていた。実際に彼が現場に居合わせたことはなかったが、それでも祖父の部屋から戻った母の不自然に前髪を垂らした、暗い影の間に、亮平がそれを盗みうかがうことに成功すると、なぜかしら、祖父が茶の入った湯のみごと母の額になげつける瞬間の様子が瞼に熱いものをこみ上げさせるのだった。その後祖父から逃げるように部屋へこもり、内で押し殺せない憎しみや悲惨のからむ、喉をつまらせたような母のとぎれとぎれのうめきが聴こえてくれば、亮平は想像のなかで何度も、母の代わりに祖父に殴りかかりながらも、母とおなじような泣き真似をしてしまうのは、それが彼自身、劣弱さゆえの妄想にすぎないことへの失望を感じずには

いられなかつたからだつた。

父親はそんなときでも、母のもとへは付き添わずに一言、「憎たらしいジジイが、早く死んでくれたらいいのに」と母に対する祖父の乱暴だけではなく、何か別のことに對しても腹を立てているように、その当時の彼には想起され、子供の亮平には解りえない祖父と父親だけの関係がもたらす憎悪が、母へ飛び火していたことをだいぶ後になって知った。

陰気な故郷に今更、とつくに友人でもなくなつた啓太を口実にやつてきた目的を彼は思い出し、実家への歩みを強める材料にしようとして一旦足を止め、今もこの町に暮らす過去の恋人で、現在は啓太を看病しているという麻己の、全てを満たしてくれる麗らかな笑顔を必死に思い出そうとしてみた。

しかし、自己の虚栄心に執着した挙げ句の果てに醜い姿となつてしまつた啓太が、今もこの町の病院に麻己の付き添いの下で生きていることが遮つて、どうしようもない現実を教えてくれる。

また歩き始めながら過去と現在を照らし合わせ、そこにほんのわずかにでも空想の先がみられなくなるとすぐに向き直り、まっすぐ実家を目指すのを止め、今は吹き曝しにある田んぼに挟まれた三軒の平屋建ての一番遠いところへ着くと、亮平はその家をしきりに気にしている様子で、去り際に婆さんを無理に引き止め、啓太の近況を訊ねた際に教えられたことを思い返していた。

啓太の飛び降りたという小豆色の屋根を持つ二階建ての、古いわりには外壁の白さをまだ保つ家の正面に回り込み、ちょうどこのあたりかと、婆さんが肩をすばめ語つてくれた大木の跡を残すメートルほどの直径はある切り株に腰をおろし、そこから見上げたところにある二階の窓から瓦屋根に降りてまっすぐにこちらへ転がり落ちたなら、ちょうどこの切り株の上に身を打ちつけることになるか。

長い間空き家になっていた為に、庭は雑草が生え放題、そのうえ若者の遊び場になっていているらしく、外壁にはスプレーで落書きがされ、弁当の容器やポリ袋、空のペットボトルに空き缶が草地に埋もれ、壊れたテレビや家具などの不法投棄までされ、とうてい人の住む気配などは感じられなかった。

これだけの時間が経っているのに未だ啓太が町の人々からどういった扱いを受けているのか、その根深い蔑みの眼差しが覗えるような荒れ具合を解し得る者は、おそらくこの地に住んでいた町民のほとんどに違いなかった。

啓太が生まれた漁師町で、彼の名を知らない者はいないほど、津原啓太という人物は有名人だったのは、彼が無意識に引き起こした数々の事件の為だった。

ある日の放課後、まだ小学生だった啓太は同級生数人の命令で、小さな商店にやって来ていた

アイスクースの商品に軽く目をやり、店番する、干からびた皮膚に斑のような染みを映すじいさんの、垂れきった瞼の奥までは除けはしないと諦め、入り口に近いところで慎重に品定めをする啓太少年が、店内を行ったり来たりを繰り返し、店番のじいさんを注意深く観察しているのを、店の外で数人の同級生が、彼とは違った緊張感を持って監視していた。

文房具が好き勝手に並ぶ木製の棚にある、日焼けした消しゴムを手に取り睨みつける。色のついた消しゴムからは上っ面だけの芳香が微かに鼻先をかすめるくらいだ。それでも彼は、なんてことはない只の「ニオイケシゴム」に多分な嫌悪感を込め睨みつけずにはいられなかった。

昨日、ここに同じクラスの女子さえいなければ、またこんな汚ら

しい駄菓子屋なんかに来ることはなく、誇り顔でこの店の前を通るはずだった今日の自身を思い浮かべ、短く整えられた爪先を消しゴムに押しつけ棚に戻す。

標的にされていた同級生のうち、自分だけがまだ悪の手に染まっていない。男の子特有の歪んだ自尊心からか、啓太はその行為が果たさなければ成らない使命であるかのように、その行為を止めてしまうという考えは浮かんでこなかったし、断れる勇気も持ち合わせではなかった。

クラスの悪い連中に目をつけられ、仲間内での親睦を深める為の“儀式”を強要されているのだが、それをしなければリーダー格の溝口がどういった制裁を加えるのかは、一度グループを抜けようと試みた別の仲間の受けたリンチ紛いの行為で充分理解していた。

（これは、自分の為にやることなんだ）と自分に言い聞かせ、啓太は老夫婦が道楽同然で営んでいる駄菓子屋に、店の外には溝口達の監視付きで居るのだが、目当てのアイスはじいさんから正面に見える位置にあるケースの中で、店内に他の生徒がいない今がチャンスなのに、焦る気持ちは小刻みな足踏みとなり、よけい怪しまれることにも頭が回らないほど狼狽していた啓太をみかねて溝口が使いを寄越してきた。

店内を何気ない調子で、それでもゆつくりと正確に啓太の場所までやって来て、耳元で囁く。（早くやしないと、防空壕に閉じ込めるって溝口が言ってるぞ）

そういつた田舎には、昔の防空壕跡が点々として残っており、溝口が仲間の制裁の為に使うそれは、入り口付近を棒で突きでもすれば、すぐさま土砂崩れが起きるくらい脆くなっている、人工的に作られた穴で、そこに数時間ほど閉じ込められ、入り口には溝口とその取り巻きがいて、溝口に土下座して謝るか、格好悪く泣き出すかなければ、出してもらえないのだった。

三

幾日か経ったある日、亮平はこんな夢を見た。

知能テストが済み、数日が経ったある日、津原啓太と吉原亮平だけが担任に呼び出されたことは他の生徒は知らず、二人だけに与えられた生涯かけての試験となった、その言葉の真意を担当が告げることはいになかった。

お前たちはもつと努力をしなければ

それはどちらにもとれる言葉だった。テストの結果、高い知能に比べ学力のついてこない二人への担任からのささやかな激励と取ることも出来たし、知能の低い二人へのせめてもの慰めとも解釈の出来る、幼い二人にはどうやっても理解しがたい、極めて曖昧な言葉だった。

活発で、成績の常に良かった啓太はそれを自分への自信の裏づけとした。彼はうぬぼれに負けない誠実さも備えた、さながら神童のような子であった。

両親は離婚し、母方の実家で暮らしてはいたけど、愛情の深い祖父と祖母に支えられ、気も体も弱い母親の下でも、確かな成長の過程を経て大人になった。

亮平の実家も啓太の実家には劣ってはいたが、その地域では並以上の暮らしで、父親の稼ぎは決して悪くはなかった。秀平の父親は割合教養のある人物ではあったものの、行動力に乏しく、勝気な母親に家庭内での発言権を奪われ、その影に隠れるような印象が強かった。

亮平の母親は学の無い女であった。それゆえにコンプレックスは人一倍で、亮平を自身の慰めの対象とした教育を施してきた。

母親は無教養さに加え、外界の影響を受けやすい体質で、ある児童書を読み、それが息子のためになると思えば、本の内容をよく咀^{そし}く

嚼もしないうちから、一読しただけで、その内容を現実に応用できるものだと早合点する、自己の力量を誤認し易い、至って凡庸な人間であつた為に、亮平は一貫性のない、その場限りの不安定な教育を受けながら大人になった。

亮平は担任の言葉を自分への劣等感の烙印と解釈した。成績は啓太に次いで良かったものの、まだ余力を残して学習する啓太と比べ、彼はその後ろを必死で追いかけるような息苦しさが常にあつた。

二人は小学校、中学校、高校までも同じところで学び、その間二人の関係は親友とも呼べる近しい仲となつていったのは、優秀な知性と立ち振る舞いが見せる俊異の近寄りがたさは他の生徒からの拒絶を招き、結果自然と二人は集団から弾かれ、孤独の最中で知り合い、卒業後二人は大学へと進み、そこで初めて別々の道を行くことになった。

啓太は子供の頃からすでに現実的な将来を見据え、医者になることを決めていたので、医学部への進学を目指し、競い合う人生に疲れ、将来に疑問を抱き始めた亮平は、それでも両親の手前なんとか経済学部を選んだ。経済にそれほどの興味もなかったが、入りたい大学の一番偏差値の低い学部だった為、そこを選び受験した。

高校時代、彼は一番になれる器ではなく、それでも時々上位に食い込む点数をたたきだし、教師と同級生を驚かせることがあつた。それが災いし、周りから一目置かれる立場に納まり、彼のなんとなくの慢心がさらに増長され、それほど熱心に修学を重ねることもなく、運良く大学受験にも一回で合格した。

啓太はどうしても高いレベルの学部で学びたい熱意から、二浪した後ようやく念願の大学への入学を果たした。大学で自分よりも年下と共に講義を受けることは、それまで順調に学歴を重ねてきた彼には受け入れがたい感情もあつたものの、それよりこれでついに医者への道が開かれるのだ、という希望の方が強かつた。

四年経ち、先に卒業を迎えようとする時期に、亮平が不振な行動をとるようになった。まず、卒論の提出に向けての面談をすっぱか

し、卒論のテーマが定まらないから留年したいと言い出し、就職活動もせずに全く関係のない講義を無断で受講したり、怪しげなセミナーに執心したかと思えば、海外でボランティア活動をしたいからお金がほしいと実家に一年ぶりの電話をして、両親を驚かせたりした。

両親の連絡で、大学側からカウンセリングを受けてみるよう勧められ、一旦は受診の約束をし、当日すっぱかす。そのすぐ後にカウンセラーに電話を入れ、どうしてもそちらへは行かなくなってしまうたと丁寧に詫び、次回の約束の日をカウンセラーと相談した。

幾度目かの診察時、一時間遅れてやってきた亮平は、部屋に一人でいると息苦しくて落ち着けなくなり、睡眠は浅く、この頃では二、三時間しか眠れず、日中突然意識がなくなることがあるので、外出するのが恐ろしいと訴えた。診察後、睡眠導入剤と不安をおさえる薬を貰い、一人暮らしの部屋へ帰ったのを最後に、そのまま外出することをしなくなった。部屋へ閉じ籠もり、薬がきれる頃またカウンセラーに処方箋を書いてもらい、無くなるまで外出を控えることの繰り返しで、両親との話し合いの末、亮平は休学することで納得した。すでに卒業の意志は失せていたが、口やかましい両親に反論する気力も湧かず言いなりになっていただけで、療養の間実家へ戻ることに反対する態度はみせなかった。

実家へ帰るとすぐに昔の友達から電話が掛ってきたが、彼はそこでも周囲との関わりを断ち、扱いに困り果てた両親の目を盗み、二十数年の短い人生を終わらせる決意をした。

その頃、かつての親友であった啓太は、大学を卒業しインターンを終えたばかりで、亮平と同じような気力の枯渴が見え始め、そのままフェードアウトするように、実家へ一言の相談もなく全てを引き払い帰省してきたので、母親は驚きの大きさに声もなかった。

生活の為アルバイトをして目的も無いまま、ただ母と祖父母に対する申し訳なさから実家での苦しい生活が始まり、一人の部屋で毎夜自己嫌悪に陥り、その中で彼はこれまで疑うこともしなかった自

分の可能性について、生まれて初めて疑いを持つようになった。

もしかするとあの教師の言葉は逆の意味だったのではなかったのか、あれは知能指数の低い自分への励ましであつたのかもしれない、と啓太は過去を顧みる時間が多くなっていた。

そんな折に、亮平が自殺未遂をやらかしたことを実家の母との電話で知り、それを理由に一時実家へ戻ることを決意した

これが今朝、亮平の見た夢のあらまじだった。それが自分の知らない細部まで、出来事の構成が整頓されていることに、彼は全身に冷や汗をかいたような心地がしていた。

四

その町にあつて啓太の深い心情を解し得る者はおそらく彼等の生まれたる漁師町では幼なじみの麻己だけであつただろう。

二人の關係は二人の意思とは別に、季節の様変わりする隙間で不意に湧き出るものであり、彼らの強く募る気持ちというよりは、季節の変わり目と非常に密接な、身体の上に現われる生理的な現象と同様に、全身を痛痒する寒々とした季節には、その季節同様二人の相手に対する想いも硬く塞ぎ込まれてしまふ一方だつたに違いない。その点について啓太はまずまちがひなく四季に通じる心理を持つていたといえるだろう。幼い頃から唯一心を開ける異性の麻己の前では、彼もあどけなさを隠しきれないでいたそうだから。

その話は、幸いにも、彼のことをよく知るといふ、彼の最も気を許した旧友に出くわさなければ分らずじまいになるところだったが、亮平が切り株からなかなか腰を上げようとしないうちに見かねた、まだ若い感じを受けるその男に声をかけられた際、ふとその男からあの二人について何かしらのエピソードを聞くことができる予感があつた為に、男から感じられる不愉快なものに耐え、その場を離れずにいた。

亮平の前まで来た男は、遠目で見てもかなり背が高いのがわかつた。土色の肌に鼻先や頬にまであかく醜い日焼けをつくるその男がそのまま腰を下ろさずにいたなら、おそらく、そこからくる不躑躅な立ち姿に、土地の者の威圧感を子供時代にもどつたような鮮明さで思い出し耐えかねる不安から、男が亮平の脇に来るよりも先に、彼の方からじつとしてはいられずに起き上がったはずだ。

しかし男は、田舎の人が往々にして持つあの特異な親しみから、やはり彼も余所者の亮平に話しかけないではいられなかつたらしく、しばらくはその感情に耐えようとして、はじめに挨拶を交わしたきり、じつと、しかし横目で控えめにやたらと亮平が右腕にはめてい

た腕時計の辺りを眺めているだけだったのが、そのうち意を決したように一段高い声で男が啓太のことを嗅ぎまわりにでもきたのかと尋ねてきた。その問いかけには答えず男の耳の穴で反響するほどねばりつく声質に、この男にはその高い声は似合わないなと、その似つかわしさをひとり心中で嘲笑ってやった。ひきつるような調子の声は男の普段のものではないことはあとの喋りでわかった。見知らぬよそ者に対する用心から普段の気安さをまだ隠しているのだろう。

もう一度男に喋らせた気持ちから亮平は「十年くらい前なのですが、この家に住んでいた津原啓太君という男の子をご存知ではないですか？」と訊いてみた。

「ご存知ありますよ。」

男は亮平から話しかけたのを合図に突然先程まであった、こちらに対する僅かな敬意をもう取り払って構わないと判断したらしい。亮平は男が馴れ馴れしいと、内心腹が立った。こちらを馬鹿に扱うような間の抜けた返答にも同様の気持ちを覚えた。不躰の親しさでくるのなら、使い慣れぬ言葉など、変にこちらに合わせようとせず、田舎の早口の方言をいくらでも揮えばいいものを、余計な気遣いなどはいらないのに……。

啓太もきつとそういったいろんな細部にわたって起こる土地の人々から受ける同質の苛立たしさの為に幾日も苦しんだのだろう。亮平は男の口の聞き方にも腹が立ってきたので、こちらも乱暴な親しみを持って話してやろうと考えた。

亮平が会話の中から極力敬語を排除するように務めだすと、男もそれを望むように口を悪くしていった。引きずられるように男は、自然と、亮平の求める粗暴さを頭わにし始め、亮平の分からぬ意味の方言も多分に交えて、彼の知る限り、啓太について語ってくれた。男はこんなふうなことを言った。

「自分と啓太とは小学校から中学校まででしたが、いや、いろいろあいつには悪ふざけをしてやった。あいつの持ち物を小さいもので

は、消しゴムや鉛筆、ある程度の事件に発展しそうな物だと靴、そうだ、鞆ごとゴミ箱に抛ったこともあった。そんな時あいつはあの色白い顔を真つ赤にしてこちらに向かつては来るのだが、手を出すとかそういうのはなく、ただ、泣きそうなのを堪えて、眼だ、眼を必死に使いそれでこちらに怒りを伝えたいらしかった。だけど、そんなことをやればますますこちらも面白がることがあいつには分らないらしくてね。そりゃあ、その時はそれで面白いと思っていたが、あんなになったのを見たらさすがにこっちの良心だって黙ってなかったよ」

男はそれを話す間、まるで啓太を自分の親友のように得意がつているようだった。全体こんな親友がいるだろうか。亮平は以前から、啓太という少年が、その体だけではなく、内面においてさえも脆弱なものを備えていたということを聞かされていた。

この男の話は癪に障ったが啓太のそのような性質については真実らしかった。啓太の味方になる友達存在をそれとなく男に訊いてみた。もう過去のことだが男の話に救いを求めたい気持ちから、亮平の口を自然についでた言葉だった。

「でも、まさかクラス全体でそういうことをしてたわけじゃないでしょう？」

「まあ、何人かの女はかわいそうとはいってたかな。それでも啓太は嫌われ者だったよ。なにがって訊かれても、目立たないやつだったけど、ちよつとしたことで目障りになるっていうか、あいつの顔見ると落ち着かなくなるってのかな、自分でも変な気分になるんだよ、こう、痛めつけてやりたいようなさ」

あの顔つきには人を攻撃的にさせるなにかが確かに、それが啓太のどういふところにあるのかはわからないが、在るということだけはいまでも憶えている。そう男は、急にそれ以上の話を重苦しそうに顎を動かしてはくれなくなった。亮平は知っているだけ喋ったからだと、男をひきとめることはしなかったし、男のほうでも道の向こうから知人が来たらしく、亮平の背後に何度か目配せをやっている

るあわただしくなった様子からもこの辺で引き下がるのが妥当かと
考え、亮平から別れをつけ男とは反対の海岸沿いの歩道へ渡り実家
までのまだ大分ある道のりを、実際の距離より長くおもえる足どりの
遠慮するゆっくりに歩みに、いやでも今日は実家に行くしかない
ことをいまさら後悔しはじめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2223r/>

棚機の子

2011年8月7日03時16分発行